

知的障害のある人のストレングスを高める支援 ―デイサービスの実践―

The Practice of Day Service: Support for the Strengthening of People with Intellectual Disabilities

矢 島 雅 子

YAGIMA Masako

1. 研究目的と背景

1981年の国際障害者年以降、入所施設福祉を中心に展開してきた日本の知的障害者福祉は変遷をたどっている。支援の場は入所施設から在宅やグループホーム・ケアホーム、デイサービスセンター、就労移行支援事業所等の広い範囲へと展開している。知的障害のある人の日中活動の場の一つにデイサービスセンターがある。1991年に創設された知的障害者デイサービスセンターは、就労が困難である障害が重い人が通う施設として地域に整備されている。

知的障害のある人の尊厳が守られ幸せな生活を送るためには、安心して暮らすことができる住まいと日中活動の場、余暇の場が必要であるとともに、信頼できる支援者が必要である。知的障害のある人の特性は一人ひとり異なるが、言葉で気持ちを伝えることが苦手であり自分の意思が伝わらない時は不安や苛立ちを感じることがある。支援者が障害のある人の意思を汲み取り、潜在的にもっている力を引き出すことにより生活のしづらさが改善されていくといえる。障害のある人が潜在的にもっている力を引き出すこと、いわゆるストレングスを高める支援については、デイサービスを利用する知的障害のある人を対象とした実践研究は少ない。

先行研究によると、デイサービスにおいて知的障害のある人がストレングスを高めるためには以下の支援方法が効果的である。作業的な活動（クッキー作り、陶芸作業、紙漉き等）において障害の重い人も関わることができるように工程を分け、得意なところで作業に参加することが仲間の力を伸ばすといわれている（高橋、2003）。また、小グループで目標を決めて取り組むことにより、自分の役割に自信と誇りをもつことができるとされている（高橋、2003）。さらに、一人ひとりのペースを尊重してゆっくりとした取り組みを中心とすることや利用者同士がふれ合う中での共感や成長を大切にする必要がある（井上、2008）。要するに利用者同士がふれ合い、集団で取り組む過程においてストレングスが引き出されるといわれているが、具体的にどのようなストレングスが引き出されているか、知的障害のある人のストレングスの特徴については明らかにされていない。

以上を踏まえ本稿は以下2点について考察を行うことを目的とする。第1は、知的障害のある人のストレングスにはどのような特徴があるのか、またそれはどのような活動場面において

みられるのか。第2は、ストレングスを高めるためにデイサービスセンターではどのような支援の工夫を行う必要があるのかである。

2. スtrenグスとは何か

(1) スtrenグスが意味するもの

ストrenグス (strength) は日本語に訳すと「強さ、長所、能力、可能性」(小島編、2004) と定義される。白澤 (2009) によるとストrenグスは利用者本人と利用者を取り巻く環境にも存在することが指摘されている。本人のストrenグスは「本人の有する能力、意欲、自尊心、嗜好、資産といった内的資源の部分である」(白澤、2009) とされる。また、利用者の環境面でのストrenグスとは「地域社会には利用者の生活を支えるために可能な資源が多数存在している。これには、家族や近隣に限らず、地域の団体の役員、ボランティア等が含まれる」(白澤、2009) ものである。

すなわち、ストrenグスは身体機能的状況 (体力・ADL・IADL)、精神心理的状況 (肯定的感情、思考・記憶・集中力、自己尊重、意欲・希望)、社会環境的状況 (居住環境、職業、経済面、医療・保健・福祉サービス、情報収集、居住地域の物理的環境、交通機関、家族・友人関係、余暇の参加等) といった利用者本人と利用者を取り巻く環境から捉える必要がある。

(2) スtrenグス視点の必要性

社会福祉実践においてストrenグスが注目されるようになったのは、1980年代末から90年代初めにかけてのアメ리카においてである。特に精神障害者の社会復帰に対応するケアマネジメントにおいてストrenグス視点が適応されてきた。ストrenグス視点が注目される以前は、利用者の病理や欠陥に焦点をあて、それを直し治療することが支援の目標とされた。すなわち、利用者の弱さの面だけに焦点をあて、利用者がもつ強さには目を向けてこなかったのである。1980年のWHO国際障害分類 (ICIDH) は、障害を「機能障害」「能力障害」「社会的不利」という3つのレベルに分け、低下している機能や能力を訓練することにより社会的不利を解決するといった弱さを解決することに重点を置いた。障害の重い人や慢性期の疾病のある人は弱者とレッテルを貼られ、自らの価値や尊厳に気付くことができずに自己実現への意欲すら失う結果になった。

その後、1980年代末から90年代にかけてカンザス大学の研究者であるラップを中心にストrenグス視点は発展する。ストrenグス視点により精神障害者はストレスに強くなり、地域での生活力をつけていくことが明らかにされた (ラップ、1998)。また、2000年に国際障害分類は国際生活機能分類 (ICF) に改訂された。ICFは「生活機能」というプラス面に注目し、人は心身の機能や構造で一部弱さを持っているが、同時に強さも持って活動や社会参加を行っている」と捉えた。今日では、ストrenグス視点は精神障害者に限定せずに知的障害者、身体障害者、

発達障害者、高齢者、児童等の広範囲にわたる領域で適応されている。そして、利用者がストレングスを伸ばし意欲や能力といった力を得ることにより、問題解決能力を高めることが課題とされている。

3. 研究方法

(1) 参与観察

本稿は、デイサービスセンターにおいて知的障害のある人がどのような相互作用の中でストレングスを発揮しているのかを明らかにするために、筆者がプログラム活動に参加し参与観察を行った。参与観察においては、①利用者同士、利用者と職員との間で交わされるバーバルコミュニケーション、②利用者同士、利用者と職員との間で交わされるノンバーバルコミュニケーション、③プログラム活動に取り組む利用者の様子（動作、しぐさ、表情等）という3点に焦点をあて観察を行った。調査期間は、2010年6月から2011年8月にかけて、毎週1回午前9時30分から12時30分まで参与観察を行った。参与観察では、利用者と職員の行動を可能な限りすべて記録することに努めた。観察した内容は文章化して記録した後、KJ法を用いて分析した。

(2) 調査対象者の概要

調査対象者は、A市内にあるA生活介護事業所の利用者17名と職員7名である。利用者は男性（11名）が女性（6名）よりも多く、平均年齢は33歳である。利用者の約半数は週5日通所している。利用者の16名は知的障害があり、そのうち6名はてんかん発作がある。また、利用者の9名は自閉症、2名はダウン症、3名は四肢体幹機能障害がある。職員はサービス管理責任者1名（男性）、支援職員6名（男性2名、女性4名）である。

利用者の1日の生活の流れは以下のとおりである（表1）。午前のプログラムは3つのグループに分かれ、畑作業や紙漉き作業、大学校庭の花壇管理を行っている。各グループは利用者が5、6名で活動に取り組み、職員2、3名が支援を行っている。

表1 A生活介護事業所の1日の流れ

時 間	活動内容
9:00～10:30	送迎（6台の車両）→施設到着→検温・お茶
10:30～12:00	朝の会→午前のプログラム（創作活動、外出、畑作業等）
12:00～13:30	昼食・休憩
14:00～15:00	午後のプログラム（音楽、ウォーキング、DVD鑑賞等）
15:00～16:30	ティータイム→送迎

4. 参与観察の結果・考察

知的障害のある人のストレングスの特徴は5点あげられる。第1は感性が豊かであること。第2は他者への思いやりの気持ちが強いこと。第3は丁寧に作業に取り組むこと。第4は支え合う仲間がいること。第5は信頼できる職員がいることである。それぞれのストレングスはどうのような活動場面において高められるのか。また、ストレングスを高めるための支援の工夫について考察を行う。

(1) 利用者本人のストレングス

1) 豊かな感性を持ち続ける

A生活介護事業所では、知的障害のある人の表現活動の一つとして「ちぎり絵」の作品作りを行っている。知的障害のある人は、言葉で自分の素直な気持ちを表現することが苦手であり、自分の思いが伝わらないもどかしさを感じている。しかし、内面は豊かな世界・優れた感性をもっている。ちぎり絵の作品作りは、一人ひとりの豊かな感性を磨く機会となっている。

知的障害と自閉症の障害がある利用者Aさん（女性）は、周囲の人とコミュニケーションをとり、対人関係を築くことが困難である。また、1日のスケジュールに変更が生じると不安を示し、集団の中で作業をすることはAさんの強いストレスとなる。そのため、Aさんの作業するスペースは仕切られ、1日の活動の流れが机に貼ってあり、職員がその都度指示を出さなくても作業ができるように個別プログラムを準備している。Aさんは手先が器用であるため、ちぎり絵やビーズ作り、ジグソーパズルが得意である。Aさんは送迎バスから職員と手をつないで自分の座席まで移動するが、人と視線を合わせないように足早に移動する。その後、机にうつ伏せになり、机の下に入ってしばらく気持ちを落ち着かせる。気持ちが落ち着いたらAさんはちぎった和紙に糊をつけて葉書に貼っていく。Aさんとは言葉を交わすことはできないが、出来上がった作品を見ているとAさんの気持ちが伝わってくる（図1）。作品を作っている時のAさんの表情は穏やかであり、身近な植物や動物のことを想像しながら優しい気持ちに包まれているのだろう。

また、知的障害と自閉症の障害がある利用者Bさん（男性）とCさん（男性）は並んでちぎり絵を作る（図2）。Bさんは5分以上椅子に座って作業をすることが苦手であり、特に気持ちに折り合いがつかない時は、窓や柱の近くに立って、大きな声を出しながら耳をふさぎ、ジャンプする。ジャンプした後は気持ちがすっきりしたのか、再び椅子に座り作品作りを再開する。Bさんはちぎった和紙を手に取り、糊付けして紙に貼っていく作業が得意である。

Cさんは毎朝壁に貼ってある1日のスケジュールを確認した後、作品作りに取りかかる。職員が絵葉書に下書きをして和紙を貼る箇所に糊を塗り、Cさんの前に置いておく。そうすると、Cさんは和紙を手にとって紙の上に乗せて、手で和紙をポンポンと押さえていく。Cさんは午前中に10枚の作品を作ることができる。Cさんの前に紙を並べておいても、手を動かすまで

に少し時間がかかる。Cさんは「ひーふーみー」と声を出し、気持ちが落ち着くとすぐに手を動かして作品作りに取り組む。

利用者が心を込めて作った「ちぎり絵」の作品は一人ひとりの個性が出ている。和紙の大きさや色が異なることにより、一つとして同じ作品はない。季節の草花や京都の大文字の風景を眺め、イメージを膨らませながら作品を作っている時の利用者の表情は穏やかで輝いている。利用者は、綺麗な景色やモノを見て感じ取った喜びや新鮮な気持ちを作品の中で表現しているのである。



図1 Aさんの作品



図2 Bさん、Cさんの作品

2) 思いやりの気持ちを大切にする

知的障害のある人は思いやりの気持ちが強く、相手の立場に立って共感する能力を持っている。参与観察の記録から、思いやりの気持ちを伝えている場面を以下に述べる。

利用者5名、職員2名が一つの机に集まり、和紙でうちわを作っている時だった。

Dさん（男性）の隣に座っていた男性の利用者がくしゃみをした時、Dさんはすぐに「大丈夫？ 風邪ひいたのかな」と声をかけていた。そして職員に「Eさん、風邪かな」とEさんの体調を心配して話し、Eさんの肩をさすっていた。Eさんはその場でうなずいて安心していた（2010年8月31日 参与観察記録より）。

毎朝、利用者はフロアに入ると連絡帳を職員に渡し、荷物を片付けて椅子に座って皆が集まるのを待つ。利用者のFさん（女性）は、利用者や職員に「おはよう」と声をかけ握手をする。そして「この椅子に座っていいよ」「お茶どうぞ」と自分から仲間を気遣う言葉かけをする。1日のスタートを皆が気持ちよく過ごせるように、相手への思いやりの気持ちを大切にしているのである（2011年3月1日 参与観察記録より）。

今朝は利用者全員の表情が暗かった。いつもは「おはよう」と元気な声で握手を交わす利用者だが、今朝はいつもと様子が違った。なぜなら、利用者のGさん（男性）が昨日、施設に入所したからだ。Dさんは「Gさんがいなくなって寂しい。今度、お母さんとGさんの施設に見学に行ってくるんや」と筆者に話してくれた。筆者はDさんに「寂しくなったね。Gさん、元気だといいね」と言うと、Dさんは「僕が施設に入ったら皆寂しいかな」

とポツリと言った。その時のDさんの表情は暗く、将来の不安を強く感じていることが伝わってきた（2011年3月19日 参与観察記録より）。

以上3つの場面から、知的障害のある人は仲間の体調を常に気かけ、皆が居心地良く過ごせるような温かい雰囲気づくりを行っていることが伺える。デイサービスセンターでは、仲間同士の心の交流を深め、利用者は自分のことだけを考えるのではなく、仲間の健康や幸せを第一に考えているのである。長年グループで活動を共にしてきた仲間が他の施設に移ることは利用者にとって耐えられないことである。遠く離れた仲間が元気になっているのか心配し、仲間のことを忘れずに思い続ける。すなわち、一人ひとりを大切にしたい思いに溢れているのである。

3) 効率よりも丁寧さを求める

A生活介護事業所では現在、ペットボトルの回収作業に積極的に取り組んでいる。地域にある施設や企業等に回収作業に出掛けることにより、ゴミのリサイクル事業に取り組んでいることを利用者自らが実感できる。回収したペットボトルは20本ずつ籠に入れ、利用者はその籠に入っているペットボトルのラベルとキャップを外して別の籠に入れていく。そしてペットボトルをつぶしてビニール袋の中に入れていくという流れ作業を行う。作業の流れが目で見えて分かりやすく、自閉症の利用者も主体的に取り組むことができる。参与観察の記録から利用者が丁寧に作業に取り組む場面を以下に述べる。

ペットボトルの回収作業は利用者が主体となり、職員は利用者が一人ではできないところをさりげなくカバーする。筆者はHさん（男性）がラベルを外しやすいようにラベルの点線の所を少し破って籠に入れ、「Hさん、このペットボトルのラベル外してね」と声をかけてHさんの前に籠を置いた。Hさんはペットボトルを見てニッコリ微笑んだ。Hさんはラベルを外すことに時間はかかるが一つひとつ丁寧に扱い、外し終わると笑顔になり、手を合わせて拍手をする。「Hさん、綺麗にできたね」と声をかけ、終了した時はHさんと一緒に拍手をした（2011年7月5日 参与観察記録より）。



図3 ペットボトルのラベル外し



図4 ペットボトルをつぶす

知的障害のある人のなかには、計画を立てて物事に取り組むことや一度に多くのことを覚えること、指先を動かして作業することが苦手なことがある。しかし、一人ひとりのペースに合

わせ、作業しやすい環境を整えることにより出来ることが増えていく。Hさんは指先を使った動きは苦手だが、ラベルを外す時は少し切れ目を入れることにより簡単に外すことができる。言葉だけで作業の流れを説明するのではなく、籠を何種類か用意し、キャップをいれる籠、出来上がったペットボトルを入れる籠を目で見て確認することにより、その都度やるべきことが理解できるのである。多少時間はかかっても丁寧に物事に取り組むところがHさんのストレングスである。

ペットボトルの回収作業以外の場面においても、調理をしている時や花の水やりをしている時にも丁寧に物事に取り組む姿が見られる。その丁寧に取り組む場面を以下に述べる。

今日は利用者4名と一緒に焼きそばを調理した。筆者は自閉症のBさん、Cさんとキャベツをちぎり、ニンジン切る作業をした。BさんとCさんは普段はちぎり絵の和紙をちぎる作業をしているため、キャベツをちぎる作業も得意だった。ニンジンを切る時はCさんと包丁を一緒に持ち、ゆっくり包丁を動かした。Dさんは野菜や肉と一緒にプレートで丁寧に焼き、焦げないように「どんな感じかな」と何度も聞きながら慎重に箸を動かしていた。材料を切り、炒め、盛り付けをする一つひとつの動作に時間はかかっても心を込めて丁寧に調理することにより、美味しい食事を完成させることができる（2011年6月14日 参与観察記録より）。

筆者はBグループの利用者5名（職員は3名）と一緒に大学内のプランターの水やりに出掛けた。皆でプランターの花の様子を眺めた時、Dさんが「元気に咲いている」と職員に話しかけた。職員もそれに応え「元気に咲いていて良かった」と言い、花が元気な様子だったので皆安心した。プランターの土が乾いていたので、筆者はジョーロに水を汲み、Iさん（女性）とジョーロを一緒に持ち、二つのプランターに水をあげた。水をあげた後、筆者はIさんに「お花喜んでね。ありがとうね」と声をかけ、Iさんははにかんだ表情をした。その後、Hさんと二つのプランターに水をあげた。Hさんはしっかりとジョーロを持ち、最後の一滴までお花に水をあげた。私は「Hさん、ありがとう」と感謝の気持ちを伝え、ジョーロをHさんの手から外そうとしたが、Hさんはジョーロを強く持ってしばらく離さなかった。Hさんはもう少し水やりをしたかったのではないかと思った（2011年7月26日 参与観察記録より）。

知的障害のある人のなかには、社会生活の経験が不足しており、意欲的に行うことが苦手な人がある。デイサービスセンターでは、調理をし、地域の学校の花壇の水やり（図5）やペットボトルの回収等に出掛ける機会をつくっている。社会生活の経験を積み重ねることにより、自信と意欲を持てるようにすることが目標である。知的障害のある人は、早いスピードで物事に取り組むことは苦手ではあるが、時間をかけて一つひとつの物事に取り組み、丁寧なモノを

完成することができる（図6）。それは、知的障害のある人のストレングスの一つである。



図5 プランターの水やり



図6 ハサミで布を切る

（2）利用者の環境面でのストレングス

1）仲間と支え合う

利用者はデイサービスで多くの仲間に出会い、支え合う中で人と協調することの大切さを学んでいる。利用者は自分のこと以上に仲間のことを気にかけ、仲間を思いやる気持ちに溢れている。仲間がくしゃみをした時には、すぐに「大丈夫」と声をかけ、仲間のことを心配している。また、仲間に「ここに座っていいよ」と席を勧め、周囲の仲間のことを気にかけている場面が見られる。デイサービスセンターでは、利用者は多くの仲間と交わる中で自分のことだけではなく仲間のことを気遣い、思いやりや助け合いの気持ちを育んでいる。

利用者同士のコミュニケーションを観察したところ、非言語表現を用いてコミュニケーションを交わしていることが明らかとなった。仲間同士でノンバーバルコミュニケーションを交わしている場面を以下に述べる。

毎朝、利用者はフロアに入ると仲間と「おはよう」と声を掛け合う。Fさん（女性）は必ず仲間と握手をする。そして「Jさん、握手してくれた」と嬉しい気持ちを職員に伝える。仲間同士で言葉だけではなく、手や足、身体全体を動かし手に触れ合いスキンシップを図ることによりお互いに安心感を得ている（2011年3月1日 参与観察記録より）。

今日はIさん（女性）の表情に笑顔はなく、自分から牛乳パックをちぎる作業をせずにぼんやりしていた。隣に座っていたDさん（男性）は牛乳パックをちぎりながら、「今日のお昼は皆でマクドナルドに行くんか」と職員に話しかけていた。「僕、何食べようかな。職員さん何食べるん」と大きな声で何度も話しかけていたところ、Iさんは机の上に置いてある籠を叩き始めた。Dさんは職員に「Iさん、物叩いてる」と言い、Iさん避けるしぐさをした。Iさんは右手でDさんの頭を叩き、すぐに職員が2人の間に入り、Iさんに謝るよう話しかけた。職員と一緒に謝ったIさんは、不満そうな顔をしており、牛乳パックの入った籠を床に投げた。職員は「Iさん、落ちた牛乳パック拾ってね。これ終わったら皆でマクドナルドに行こうね」と声をかけたところ、Iさんは笑顔になり、床に散ら

ばった牛乳パックを拾い始めた（2010年10月12日 参与観察記録より）。

知的障害のある人は非言語を頻繁に用いて気持ちや考えを人に伝えようとする。非言語とは、表情や視線、しぐさや態度、服装や身だしなみ、タッチングやアイコンタクトといったボディメッセージと声の大きさや速さ、高さ、トーン、アクセントという音声メッセージである。利用者のFさん（女性）は必ず人と挨拶する時に握手をする。Fさんと握手をした相手は穏やかで優しい表情になり、お互いに相手の存在を認め合っている。手に触れ、握るというタッチングは、お互いの苦痛や不安を癒し、信頼関係を強めることができるのである。ボディメッセージや音声メッセージを受け取る手段は、視覚や聴覚、触覚や嗅覚、空間感覚である。非言語コミュニケーションを用いてお互いに信頼を深める知的障害のある人は、あらゆる感覚機能を駆使してメッセージを瞬時に受け取っているため、感覚機能が豊かであるといえる。

知的障害のある人のなかには言葉で自分の素直な気持ちを表現することが困難であり、思いが伝わらずにストレスを抱えてしまうことがある。仲間や職員の会話に入っていくことができずに疎外感を感じてしまうことは度々ある。利用者のIさん（女性）は、感情を言葉で表現することが難しく、態度で思いを伝えることがある。叩いたり、物を投げる態度の背景には、利用者の不安や焦り、孤独感といった心の葛藤がある。職員は心の葛藤を理解するとともに、利用者がより良い方法で気持ちを表現できるように支援することが必要となる。

2) 支援者と信頼関係を深める

利用者が安心して暮らすためには、信頼できる人とのつながりが欠かせない。職員が日々の支援の中で心掛けていることは、①健康状態を改善すること、②利用者の気持ちを汲み取ること、③利用者のペースを尊重すること、④利用者の長所を伸ばすこと、⑤利用者のストレスを和らげることである。

健康状態の改善については、職員は利用者の身体面や精神面の健康状態（食事、睡眠、排泄、気分の変化等）を利用者や家族との会話や連絡帳によって確認していく。また、日常生活で運動することが少ない利用者に対しては、プログラムの中でウォーキングを取り入れ、健康づくりに取り組む。

利用者の気持ちの汲み取り方については、利用者の良い所を褒める言葉かけを常にしている。職員は利用者ですれ違う時に、「Aさん、おはようございます。元気ですか」と声をかけ、さらに利用者の良い所をほめる言葉かけを常にしている。「よく出ていますよ」「素敵ですね」「その調子でいいですよ」等と利用者の意欲が高まるように温かいほめ言葉を伝えることで、利用者の表情は笑顔になり、一人ひとりが生き生きと活動に取り組めるようになる。その時に言葉かけだけではなく、スキンシップを図ることで利用者に安心と自信の気持ちを持ってもらうように工夫している。職員が利用者の手や腕、肩、背中を優しくなでると利用者は穏やかな表情になり、お互いの心が通い合っていることが分かる。

また、コミュニケーションを行うための工夫として自閉症の障害のある利用者が自分の思い

を伝えやすいように絵カードを活用している。視覚的な手がかりとして文字や絵・写真を活用することは、自閉症の障害者に安心感をもたらすことになる。活動を始める前に行う朝の会では、利用者の一人がホワイトボードを持ち、職員が日付や天候を確認し、ホワイトボードに文字を書いていく。そして、各グループが1日に行う活動の内容を書き、全員で確認をする。1日の活動の流れを図で示すことにより先の見通しが分かり、自閉症の利用者も安心して1日を過ごすことができるのである。

利用者のペースの尊重については、利用者が自分で考えて行動に移すまでに時間がかかって、決して焦らせることなく利用者のペースに合わせるようにしている。利用者の様子を見守り、利用者と共に過ごす時間を大切にすることのゆとりが職員には必要とされているのである。

利用者の長所については、創作活動の時には糊づけをすることが得意な人もいれば、ハサミで紙を切ることが得意な人もおり、得意な分野で自信をつけ苦手なところは互いにカバーしている。どうすれば利用者が自分の力でできるようになるのか考えることが支援者の役割となる。自閉症の利用者がちぎり絵をする時には、ちぎった紙をどこに糊づけしたらよいかを職員が事前に印をつけておき、印を見ながら利用者は主体的に作業に取り組むことができる。利用者が作業しやすいように材料を準備し、手順を示す等の工夫をすることが必要である。

さらに、達成感が目に見えるように作品を残し、施設の玄関ホールに展示して地域の人々に見てもらう機会を作ることも必要である。ちぎり絵の葉書はバザーでも販売され、自分たちの作った作品が多くの人に届くことが利用者の達成感につながっているといえる。

利用者のストレスを和らげることについては、楽しく温かい雰囲気を作るために職員が音楽を活用し、また、利用者が一人でくつろぐことができるスペースを作っている。フロアの窓際には3箇所ソファが置かれ、利用者が一人でくつろぐ時には仕切りをして落ち着くことができる空間を作るようにしている。音楽の活用については、利用者がそれぞれ好きな音楽を聴く時間を設け、また、職員と利用者が一緒に童謡を口ずさみ、気持ちが穏やかになるように音楽を日中活動に取り入れている。人と人との交わりがあるデイサービスセンターは、自然に明るい笑い声が響き、楽しく温かい雰囲気に包まれている。

(3) 利用者自らが役割を見つける

利用者一人ひとりが役割をもつことにより、主体性や協調性が育まれる。昼食は各グループに分かれ、机や椅子の準備を利用者が職員と一緒に、食事前の準備を行う。お茶を注ぐ人、机を拭く人、それぞれがグループの中で役割をもち、「自分でやってみる」という経験を増やしている。利用者Fさんは、「私、お茶を注ぐのが好き」と話し、グループの人のお茶を注ぐことが自分の役割だと認識している。職員はいつもFさんに「ありがとう」と声をかけ、Fさんが自発的に行動していることを見守っている。自分でやってみる経験を増やすことにより、自信がつき、意欲が出てくるのである。実際、Fさんも仲間のお茶を注ぐ経験をしてから、自分に自信がつき、デイサービスセンターで行う調理実習にも意欲を持って取り組んでいる。調

理実習で筆者がFさんとサラダを作っている時、Fさんは自分から野菜をちぎったり、卵を割ったり、主体的に調理に参加していた。Fさんは自分が作ったものを仲間が美味しく食べている様子を見て、嬉しそうにしていた。人に喜んでもらえたという経験が利用者自身の自信や喜びにつながり、日常の暮らしに張り合いが出てくるといえる。

役割をもつことは、利用者自らが生活主体者であることを実感できることにつながる。これまで援助を受ける立場に立っていた利用者が仲間をサポートする立場になり、互いに助け合う関係へと変化する。また、日中プログラムの一つである大学校庭の花壇の手入れを行うことは、援助を受ける立場から植物を世話する立場に利用者が立ち、自らが生活主体者であることを実感することができる。役割をもち、人の役に立てた経験が利用者の自信や生きる力に結びつき、生活主体者としての意識が強まるのである。したがって、役割を担うことは、①主体性や協調性を育み、②自発的行動につながり、③自信や意欲につながり、④生活主体者となることができるのである。

（４）ストレングスを高める支援の工夫

デイサービスセンターに通所している利用者はストレングスとして「豊かな感性」「他者を思いやる強い気持ち」「丁寧にやり遂げる」「助け合う仲間」「支援者との強い信頼関係」をもっている。利用者本人がもつストレングスと環境面でのストレングスは相互作用し、環境面でのストレングスが高まるにつれて利用者本人がもつストレングスが高まる傾向にある。

仲間や職員との信頼関係が深まることにより、あるがままに自分を受け入れると同時に他者に対しても温かい思いやりの気持ちをもつことができる。また、自己肯定感が強まることで気持ちに余裕が生まれ、丁寧に取り組むゆとりや感性をさらに伸ばすことができる。デイサービスという集団の活動の中で利用者1人ひとりがもっているストレングスをさらに活かすためには、そのストレングスを施設の外に発信していく必要がある（図7）。

いわゆる、利用者の社会経験を広げる機会を作ることが重要である。A生活介護事業所では、日中の活動場所を施設内に限定するのではなく、地域に出掛けていく機会をつくっている。利用者の希望に応じて、近くのレストランにグループで外食に出掛けたり、施設の近くで借りている畑で野菜を育てたり、さらに近隣の大学内の花壇の苗の植え替えや水やりをする活動にも取り組んでいる。利用者にとって外に出掛けることは気分転換になり、身体を動かす貴重な時間である。外の空気を吸い、人や街の様子を見ることにより、この地域社会に暮らしていると実感が持てるようになる。仲間と一緒に外食をすることは生活の楽しみの一つである。自分で好きなものを注文してお金を支払う経験は、自ら主体的に生活することの喜びや楽しみにつながっている。そのような楽しい経験の積み重ねが利用者一人ひとりのもっている力や内面を輝かせるのである。

社会経験を広げることにより、仲間や職員以外の地域の人と出会う機会も増えてくる。大学内の花壇の水やりでは学生と挨拶を交わし、また、近隣の公園では住民の人と会話をする機会

もある。人とのつながりが広がることにより、さらにストレングスが豊かになっていくだろう。

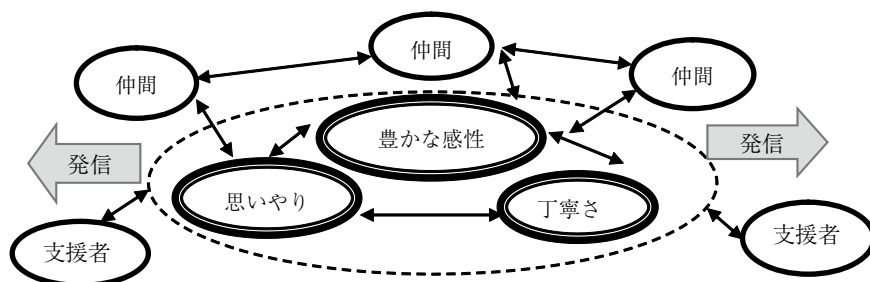


図7 知的障害のある人のストレングスの構造

5. まとめ

デイサービスセンターにおける参与観察の結果、知的障害のある利用者本人のストレングスには「思いやり、豊かな感性、丁寧さ」という特徴があった。また、利用者を取り巻く環境面のストレングスには、仲間や支援者（家族・職員・ボランティア等）の協力や支援があり、仲間や職員との相互の交わりの中で本人のストレングスが高められているといえる。

知的障害のある人がその人らしく心豊かな人生を送るためには、社会経験を広げ役割を果たし、生きる意欲と自信を持つことが重要である。就労することが困難である知的障害のある人が役割を持ち社会貢献していることを経験する活動の場所が必要である。今後は、デイサービスセンターを拠点とし地域社会にそのような活動の場を広げていかなければならない。さらに、A生活介護事業所では地域住民と交流を深め、障害者福祉への理解や事業の啓発を目的とした「ふれあいまつり」も実施している。今後は近隣の小学校や大学の学生をはじめ地域住民が支援者として加わり、支援の輪が広がることが期待される。

引用・参考文献

- 高橋憲二（2003）『自立と援助の障害者福祉』かもがわ出版 124-127
- 井上一成（2008）「日中活動について考える」きょうされん重度重複障害部会編『ひかり輝くなかまたち―障害の重い人を支える実践記録』萌文社 50-51
- 藤本次郎（2004.1）「知的障害者の地域生活（Ⅰ）日中活動の場の現状と課題」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』16（3）：181-186
- 小島義郎他編（2004）『英語語義語源辞典』三省堂 1148
- 白澤政和（2009）『ストレングスのケアマネジメント』ミネルヴァ書房 2-7
- 上田敏（2005）『KSブックレット NO.5 ICFの理解と活用』きょうされん
- チャールズ・ラップ（江原敬介訳）（1998）『精神障害者のケースマネジメント』金剛出版
- 狭間香代子（2001）『社会福祉の援助観 ストレングス視点/社会構成主義/エンパワメント』筒井書房
- 小松源助（1996）「ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開」『ソーシャルワーク研究』22（1）：46-55